

「ビジュアルメディア EXPO2016」

神谷 直亮

「拡がり続けるビジュアルメディア」をテーマに掲げた「ビジュアルメディア EXPO2016」が、12月7日から9日までパシフィコ横浜で開催された。「国際画像機器展 2016」の併催イベントという位置づけで、非常に小規模な展示会であったが、VR、4K、3D、ドローン、プロジェクションマッピングなど、多彩な機器、システム、コンテンツが集結していた。

まず、最も注目を集めたのはVRと言っても良い。この分野の出展者としては、キャノン、UEIソリューションズ、シンク・デザイン、スタジオ・エムティーフィールドが挙げられる。

キャノンは、フランスのVideoStitch社のカメラシステム「Orah 4i」で撮影した360度ライブVRビデオを「Virtoba X5」ヘッドセットを使って、来場者に視聴を促していた。出展された「Orah 4i」には、4台の魚眼レンズ付きカメラと4個のマイクが装着されており「画質は4K 30fpsで、音声はAmbisonic 3D サウンド」とのことであった。キャノンが、VideoStitch社に目を着けた理由については、「映像を360度リアルタイムにつなぎ合わせるソフト技術に優れているから」と説明していた。

UEIソリューションズは、「VRider」と名付けた4K8K VR動画ソリューションパッケージをPRした。このソフトの特色は、複数台のカメラで撮影した映像を、高解像

度の円周動画としてオーサリングし、低コストでVRコンテンツを再生して見せることができる点にある。実績として挙げているのは、「カラオケにVRiderを連動させた参加型新カラオケシステム」と「高知県のPR動画、ぐるっと高知家バーチャルツアー」の2作品であった。

シンク・デザインは、手軽で低価格な「QUICK360」のPRに余念がなかった。その名称の通り、クイック撮影、クイック配信、クイック視聴がウリである。クイック撮影は、リコーの「シータ」のような360度2眼カメラを使って簡単に撮影する。クイック配信は、QRコードを使うことでコンテンツを簡単に配信し、ユーザーによるアクセスを実現する。クイック視聴は、「QUICK360」と名付けた専用モバイルVRビューアを使って手軽に行えることを意味している。この「QUICK360」ビューアは、持ち運びが簡単にできる折り畳み式で、重量はわずか9グラムに仕上がっている。つまり、QRコードが入った印刷物と一緒に「QUICK360」ビューアを配布して、まず、このビューアを組み立ててもらう。次いで、QRコードをスマートフォンで呼び込んで、ビューアで視聴するという段取りになる。ブースの説明員は、すでに販売したサンプルとして「江の島ヨットハーバークルージング体験」と「夏油温泉 観光VR～シキオリ～」を挙げていた。

スタジオ・エムティーフィールドは、「VR

動画の企画コンサルティングから撮影、編集まで行うことができる」と熱心に売り込んでいた。4Kはもちろん、8K動画VRコンテンツにも対応できるという。

次いで、3D関連のコーナーが話題を呼んだ。3Dコンソーシアム、3DBiz研究会、立体映像産業推進協議会が、ステージVRコンソーシアムを12月21日に設立するという予想外の報道発表が行われたからである。この発表内容によれば、3Dコンソーシアムの泉邦昭副会長が発起人となって「映像酔いのない安全で魅力的なVRコンテンツの普及を目指す」という。その名称の通り、コンサートや舞台などステージ上のパフォーマンスを主な対象にしており、3Dで撮影して必要に応じて3D CGと組み合わせるという制作方法を考えている。つまり、視聴者の位置を固定して、現実起こりうる視点移動だけに制限することで、映像と身体感覚のずれをなくして映像酔いを生じさせないVRコンテンツを制作するのが狙いと思われる。

まだ発足前であったが、展示会場のブースには、ステージVRコンソーシアムが考案したという特製のカメラが披露され、このカメラを使って10月29日に撮影を試みた「マレック・シュパキエヴィッチ・チェロリサイタル」の映像が、会場の3Dシアターで公開されて脚光を浴びた。

カメラについて説明を求めたところ「ブラックマジックデザイン社製フルHD Micro Cinema Cameraを4台使っている。システム構成は、上段に1台、下段に3台のカメラを並べ、上段のカメラには韓国のサムヤン社製単焦点魚眼レンズ7.5mm F3.5を搭載し、下段に配置された3台のカメラには、オリンパスとパナソ



写真1 キヤノンは、4台の魚眼レンズ付きカメラと4個のマイクを組み合わせた360度VR撮影システム「Orah 4i」を出展して注目的になった。



写真2 ステージVRコンソーシアムは、独自に考案したという特製の4眼カメラを披露して来場者の耳目を集めた。

ニックのマイクロフォーサーズ専用ズームレンズを搭載している」とのことであった。左右2眼ではなく3眼にした理由を聞いてみたところ「センターカメラでフルHD映像を撮影し、その左右

のカメラとの同期をとりながら必要なデプス情報を入れて3D映像にする」との回答であった。今後の課題については、「4Kや8K映像とハイレゾVR音響を組み合わせ、さらなる没入型コンテンツをライブで制作したい」と語っていた。

なお、3Dシアターでは、既述の「マリック・シュバキエヴィッチ・チェロリサイタル」の他に、「Don't Stop the Dance」「秀麗富士」「Aoi～碧～サカナクション」「Work in Progress」が上映された。

この他、3Dのコーナーでは、3DBiz研究会と同会のメンバーが多彩な展示とデモを行った。特に注目を集めていたのは、ギャマンとたしてんの両社が出展した「3D AIR VISION」と名付けたイマジン・ボックスであった。

さらに、4K関連の展示とデモも目付いた。この分野の出展者としては、JVCケンウッド、三友、関東学院大学が挙げられる。JVCケンウッドは、同社特注の36インチ4Kリアプロジェクションシステム「LY-HDR36」を使って、高輝度HDR映像を再生して見せた。再生された映像は乗用車で、業務用途やデジタルサイネージを狙っているように思われた。ブースの説明員は、「車の表面の透明感と反射光のまぶしさ、暗部の見栄えとリアルな質感が忠実に再現できている」と、盛んに強調していた。

三友は、デジタルサイネージを想定した広視野角ガラスレス4K3Dディスプレイ「OAKTAIL 4K」によるデモを行って注目を集めた。レンチキュラー方式を採用しており、「シャープ製4K液晶パネルと3D偏



写真3 三友は、レンチキュラー方式による広視野角ガラスレス4K3Dディスプレイ「OAKTAIL 4K」のデモを行って注目を集めた。



写真4 ジュエは、珍しい深海でのVR撮影が可能なセット（GoPro製カメラ6台搭載）を紹介して来場者の関心を呼んだ。

向フィルター（Xpol）を組み合わせている」と説明していた。

関東学院大学は、市販のジンバルにソニーの4KハンディカムFDR-AX55を搭載して撮影したというミュージックビデオ「ブルーコンパス」を披露した。

4つ目の分野は、ドローンだ。今年には、イデオモーターロボティクス、ジュエ（JUER）、サークルの3社が自慢のドローンを会場に持ち込んでいた。

イデオモーターロボティクスは、Freefly社の「Alta 8」をブースに展示して、熱心な売り込みを行った。「2016 NABショー」で発表され、8月から発売を開始した最新の製品とのことであった。この他、同社は、グライフォン・ダイナミックス社の高品質・軽量のフレームとMoVi M10ジンバルを使って製作したという同社特性の8ロータードローンを紹介した。機体のラインナップとしては、この他に4ローターと6ローターも揃えているという。

ジュエは、自社開発の特殊な360度防振ジンバルを基盤にしたVR撮影用ドローンを紹介した。今回展示されたのは、ブラクマジックデザイン社のUrsa Miniカメラ4台にインタニア社製の魚眼レンズを組み込んだセットで、シネマVR撮影システムとして最適と思われた。この他、同社のブースには、GoProカメラを6台組み込んだ珍しい深海VR撮影セットが展示されており、来場者の耳目を集めていた。

サークルは、Freefly社の「Cinestar 8」とDJI社の「Inspire 1」を紹介した。4K撮影について聞いてみたら「DJIのX5R

カメラをInspire 1に搭載すれば、1フライトで約15分の4K RAW動画の撮影が可能」と答えていた。

最後に、プロジェクションマッピングを忘れることができない。デモを実施したのは、最先端表現技術利用推進協会（表技協）である。ブースでは、表技協が毎年大みそかに行っているという東京・目黒区にある円融寺のプロジェクションマッピングイベントを再現していた。担当者によれば、この他に「今年5月30日に、錦帯橋プロジェクションマッピング 時空の架け橋を行って好評を博した」と語っていた。

変わったところでは、フォーラムエイトが、脳波ドライビングの体験を促していた。「MindWave Mobile」と名付けた脳波計測装置を頭に装着し、脳波で車のアクセルとブレーキをコントロールしながら運転するという非常にチャレンジングなシミュレーションである。

ソリッドレイ研究所は、ブースで最新の「タップトーク2」（床に投射された映像に触れることで反応する映像システム）をPRした。最新を謳った背景については、「赤外線センサーから測域センサーに変えたので、低位置から床面10mをカバーできるようになった」と説明していた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディアジャーナリスト